四十年と、ちょっと。

「お帰り」と、憶えていてくれる人もあって、2007年4月、わたしは20年ぶりに「奈文研」に帰ってきた。庁舎も築何十年の貫禄に、ますます風格を増し、「まだ、そのままやったんやなあ」と、それにも妙な感懐があったり、あのころは会計課といった

部屋の自分が座っていたあたりを思いだす。窓越しに、夏になると、うすい紫の花をつけるムクゲの木が、確かにあったはず。

最初に転任してきて２年目、1986年から始まった長屋王邸宅跡やその周辺の発掘で11万点もの木簡が出土した。用意したコンテナは、またたく間に足りなくなって、新米の用度係長は、係の人と一緒にその緊急手配をする「お役目」を担うこととなる。宮跡の発掘開始前には、現場ハウスと仮設トイレを先ず用意して、埋め戻しには、トラック何台分かの砂を発注する。空撮のためのヘリコプターは八尾の飛行場から飛んでくる。

前任の博物館とは、まるで違う仕事も、活気があって面白かったし、現場を終えたあとの研究員の人が誘ってくれる「放課後」も、また楽しかった。

あのころ小学生だった娘は言っていた。「お父さんの研究所のこと、新聞によく出てるね」。ちょうど社会科の時間に、奈良の都のことなどを勉強していたのだろう。仕事の締め切りや日ごとの伝票処理や東京からの電話に追われていて、発掘のことや研究の中身などほとんどわからなかったが、「お父さん」としては、ちょっと鼻が高かったものだ。

広島、東京、大阪勤務と、奈良博を経由して戻ってきた、２度目の「奈文研」は、高松塚古墳の発掘調査と石室解体のさなかにあった。そして、平城宮跡の国営公園化や遷都1300年祭に向けて、研究所を取り巻く状況や、独立行政法人としての運営の難しさなど、課題はますます大きくなるばかりだ。

公務員として勤めはじめて（いまは、独法職員ということになるが）、40年とちょっとのうち、奈文研は６年。生来の気短かで、若い頃はよく人とも衝突した。まわりの方々のご辛抱とご理解をいただいて、ともかくなんとかやって来ることができたのだと思う。いまなら打ち明けてもいいだろう。仕事がうまくいかなくて、宮跡の中の道をとぼとぼ歩いていたこともあるのです。そうして今、２度にわたって奈良文化財研究所の一員として送ることができた幸せを噛みしめている。　（管理部長　西村 博美）

退職者のひとこと

前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長